

見附市本所出土丸木舟について

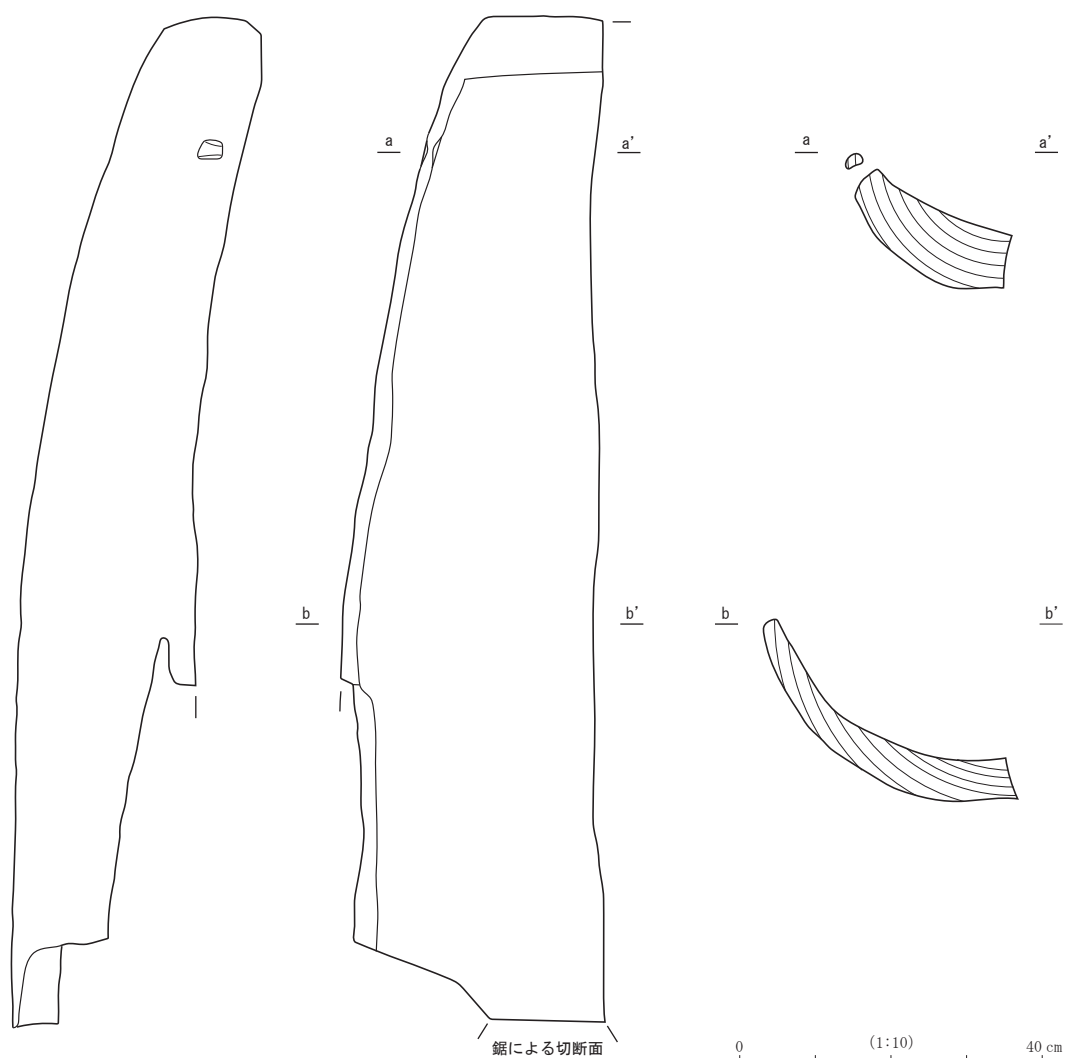
小野本 敦

はじめに

本稿では、見附市本所で出土した丸木舟（以下、本資料と表記）の観察と図化を通して考古資料としての評価を行うとともに、見附市域の歴史における位置付けについて述べる。

1 発見の経緯と来歴

本資料は、1981年3月中旬に見附市本所1丁目2番地内（第4図）において下水整備工事中に発見され、



第1図 丸木舟実測図

7月21日付で新潟県文化行政課埋蔵文化財係に報告されている。その後は見附市教育委員会で保管され、長らく非公開であったが、2019年度のみつけ伝承館の企画展「刈谷田川の舟運と近世の流通」に関連資料として展示された際に筆者が確認し、市教委の御厚意により観察と図化を行った。

2 資料の観察

実測図を第1図に示す。便宜的に、残存する先端を船首、反対側（平面図下側）を中央側、舷側を左舷と呼称する。

船体は木目に沿って縦に割れている。現状は完全に水分が失われ、乾燥によるひび割れなど劣化が著しく、調整痕等は確認できない。樹種同定は行われていない。割れ目から左舷までの断面（b-b'）がほぼ円周の1/4の弧を描くことから、割れ線がほぼ船体の中心軸にあたるものと考えられる。資料の損耗の恐れがあるため、正位に据えて作図することはできなかった。このため断面（b-b'）をみると実際よりやや左に傾いている可能性がある。



1 側面



2 内面



3 船首



4 船首付近側面の孔（外側から）



5 鋸による切断面

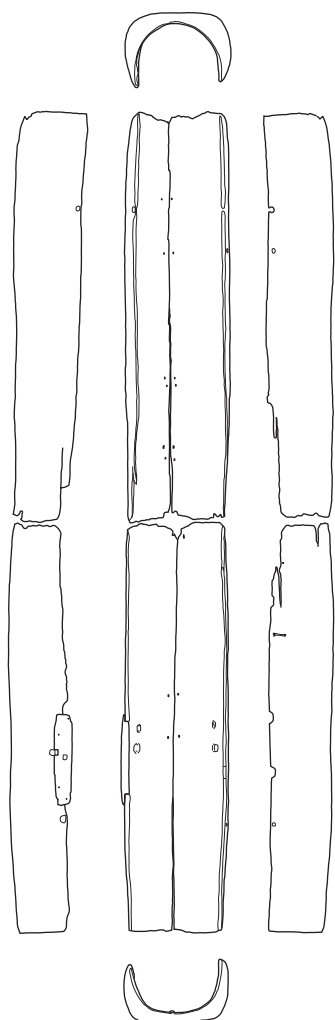
第2図 丸木舟写真

内外面にホゾ穴、チキリ穴などは確認できず、単材の丸木舟と考えられる。残存長は133cmを測る。船体の厚みは中央側の船底で5.5cmであり、船首に向けて徐々に増す。船底・舷側は船首に向かって緩やかに立ち上がる。船首の先端は平らで、上面にも平坦面を有する（第2図3）。船首付近の側面には1辺3cmの四角い孔が、外側が下方を向くように穿たれている（第2図4）。孔辺の左右は摩耗しており、特に船首側が顕著である。係留または曳船のための綱を掛ける孔と推定される。中央側の船底は鋸によって切断されている（第2図5）。

3 資料の評価

前近代の越後平野では、阿賀野川・信濃川の排水不良によって出現した無数の潟湖とそれを結ぶ網目状の小河川が物流の大動脈であった。そのため、喫水線の浅い丸木舟の需要が高く、縄文時代晩期から中世まで多くの出土例が知られる〔鶴巻 2007〕。本資料は、信濃川流域では最も上流側での出土例である。

本資料の大きな特徴は鋸によって木目と直行する方向に分断されている点である。これは明らかに使用



1 実測図（縮尺 1/50）



2 出土状況



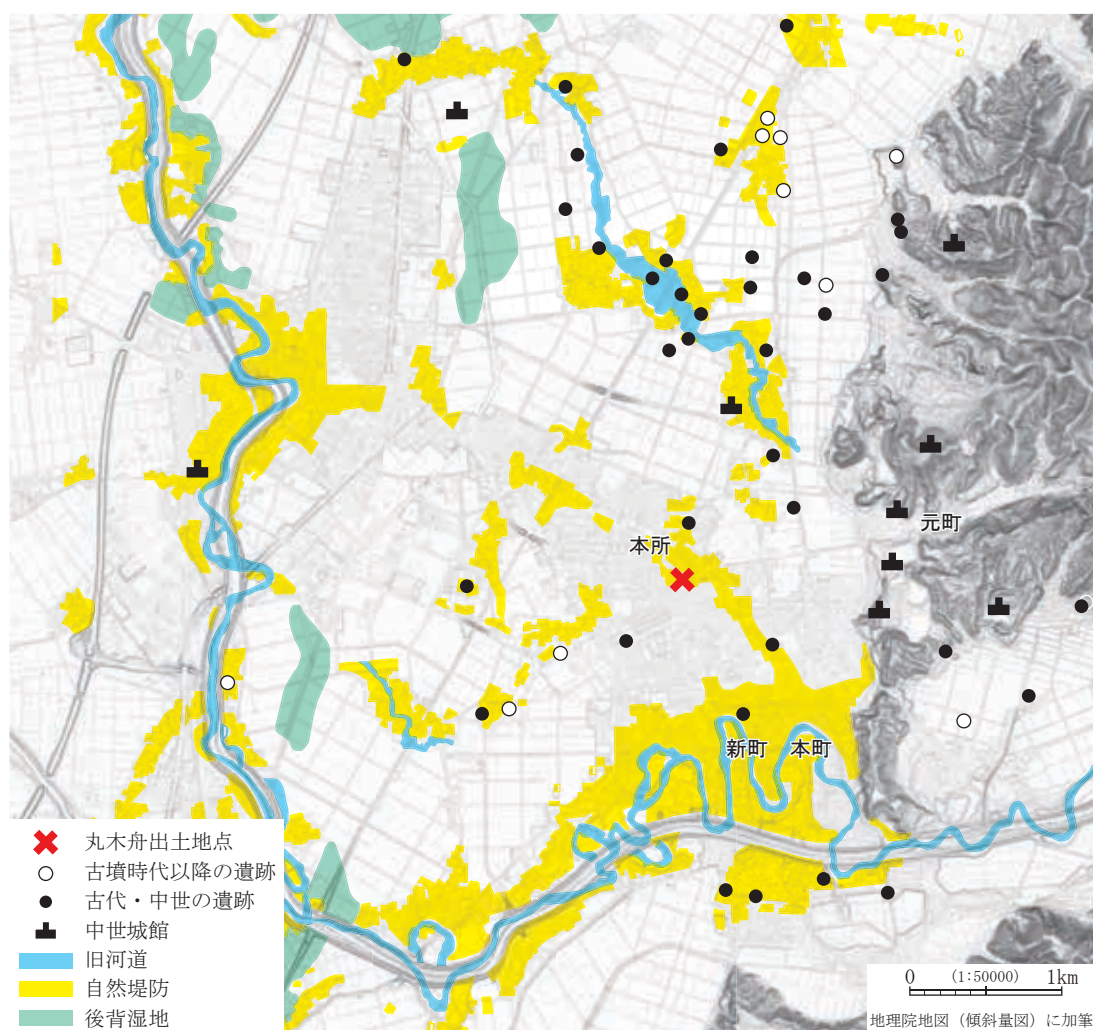
3 鋸による切断痕

第3図 石船戸東遺跡の丸木舟

時ではなく、解体時の痕跡である。単に丸木舟を廃棄したのであればこうした作業は不要であることから、船体中央部を再利用するために解体されたと推測される。よく知られたことだが、越後平野の古代～中世の丸木舟のほとんどは井戸側に転用された状態で出土する。具体的には、第3図2のように分割した船体を筒状に組み合わせて井戸に据え付けるのだが、その際、不要となる船首・船尾は除去される。船首・船尾の切断には手斧が用いられる場合と、第3図3のように鋸が用いられる場合がある。こうした点を踏まえて本資料の形態を見ると、ちょうど井戸側転用時に不要となる、船底が緩やかに立ち上がり始める部分から船首までに相当することがわかる。以上から、本資料は丸木舟を井戸側に転用した際の余材の可能性が考えられる。丸木舟を井戸側に転用する事例は12～14世紀に多く、その後は見られなくなることから[鶴巻 2007]、本資料の推定年代の下限もその頃に置くことができるだろう。なお、古代～中世の丸木舟は上述のような出土状況により、船首・船尾の構造が判明するものが少ないことから、本資料は貴重な事例と言える。

4 刈谷田川流域の景観と舟運

近年、阿賀野バイパス関連で中世遺跡の発掘調査が多く行われた阿賀野市域では、阿賀野川の旧河道（江



第4図 丸木舟の出土地点と周辺の環境

戸時代の百津潟)の縁辺に拠点的な遺跡が立地し、百津潟に注ぐ小河川の付近で丸木舟が出土するなど、「白河荘」の発展と内水面交通の関係が具体的に明らかになってきている [小野本 2019]。見附市域には、かつての刈谷田川河道に由来すると考えられる自然堤防が多く認められ (第 4 図)、白河荘の様相を参考にすれば、見附城跡などの立地する元町一帯を中心に刈谷田川水運の拠点として発展したことが類推できる。本資料はそれを物語る物証と言える。現時点では推測の域を出ないが、元町の西側に自然堤防が発達せず、現在まで水田として利用されていることからすれば、この範囲に百津潟のような潟湖が存在し、本所は潟湖をはさんだ元町の対岸に位置したとは考えられないだろうか。この当否はともかく、今後の調査により本所周辺と元町との関係が意識的に検討されることで、古代・中世の見附市域の景観がより鮮明となることが期待される。

謝辞

資料調査に際し、安藤正美氏・増田一実氏・今井秀樹氏をはじめ見附市教育委員会の皆様にご多大のお世話になりました。記して感謝の意を表します。

引用・参考文献

- 安藤正美 2006「第Ⅵ章 1 旧河川について」『見附市埋蔵文化財調査報告書 27 辛子田 A 遺跡・辛子田 B 遺跡』見附市教育委員会：111-115 頁
- 小野本敦 2019「第Ⅱ章 白河荘の地理的環境と遺跡立地」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 279 集 石船戸東遺跡』新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団：9-13 頁
- 土田邦彦 1981「序編第 1 章 見附市の自然」『見附市史』上巻 (1) 見附市史編集委員会：3-49 頁
- 鶴巻康志 2007「新潟県における古代・中世の刳船について—オモキ造りによる川舟・潟舟の出現期をめぐって—」『新潟考古学談話会会報』33 新潟考古学談話会：1-28 頁
- 新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2019『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 279 集 石船戸東遺跡』

図版出典

第 1 図・第 2 図 筆者作成・撮影

第 3 図 新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 [2019] を改変

第 4 図 見附市の地形区分図 (見附市教育委員会提供)、地理院地図、新潟県遺跡地図をもとに筆者作成